

# 信 毎 俳 壇

## 神野 紗希 選

- 海底の白き廢都より安貝 (小諸市) 加藤 陽介
- 春まけて封蝸の鳩ははたけり (中野市) 風間 陽介
- 雪女牙山より来たと言ふ (佐久市) 佐藤 勝子
- 木花咲く谿へ谿へと獸道 (松本市) 新田 順子
- ハンバーグこねてたたきて春めきぬ (飯綱町) 小林 紀子
- 好き嫌ひ言はざる母が海鼠には (須坂市) 丸山 葵子
- 耕やフォッサマグナを西に観て (長野市) 藤沢 方恵
- 春風や猫がもてる畑鼠 (長野市) 福沢 ナナ
- 帰宅した受駿子の弾く「ねいふんじゃった」 (佐久市) 真山 邦弘
- 白墨の七言絶句春近し (松本市) 伊藤 和夫
- 天国にある穴なのよ冬の月 (下諏訪町) 立石 理
- 独り居は白湯の味わい月冴ゆる (喬木村) にこ たん

選評

一句目、滅びて沈んだ都。壇ノ浦で安徳天皇を抱き入水した二位尼の「波の下にも都はございます」も思う。子安貝が幻の都のかけらとして白く光る。二句目、「春まけて」は春になって、の意。手紙の封蝸の柄として押された鳩が、季節の到来をほがらかに告げる。三句目、牙山は浅間の外輪山。牙の一字が雪女に潜む激しさをほのめかす。四句目、木花は樹氷のこと。獸道の景色は厳しく美しい。

## 坊城 俊樹 選

- 春の雪須磨子の恋を詳らかに (松本市) 森山 豊子
- 熱燭やちよい盛り兄の恋話 (長野市) 渡辺 恭子
- 霜柱踏んだ分だけ罪深し (塩尻市) 藤森 円
- 百歳の元氣印の大ききめ (塩尻市) 古厩 林生
- 大津絵の鬼の居座る鬼やらひ (佐久市) 佐藤 勝子
- 寒弾や撥先触るる一の糸 (松本市) 伊藤 和夫
- 父といふ職人をりし冬日向 (須坂市) 東島 雄二
- 鬼やらひ終りて鬼の男ぶり (中野市) 田川 寿男
- 遺影抱く従姉の顔の悴めり (佐久市) 木内利一郎
- 氷瀑の深き藍色黙しをり (佐久市) 岩下サク江
- 鯉透けて薄水わづか緩みをり (上田市) 久保やす子
- 山峡の春一番や旋風立つ (飯田市) 大石 昭重

選評

一句目、須磨子は松井須磨子のことだろう。彼女は恋多き女優としての記憶がある。ここに降る春の雪はあでやかで彼女の恋を詳らかにしているように思えた。二句目、「ちよい盛り」とは少し話を大きにしたということ。酔うほどに兄の恋の話はどこか盛っている。本当にそんな恋だったのか。三句目、これは実感として分かる。霜柱がギューという音をして踏まれてゆくのはどこか罪深い。

## 今井 聖 選

- ボクサーの傷に顔あり冬満月 (塩尻市) 神戸 千寛
- 霜柱踏む大足の大魔神 (松本市) 伊藤 和夫
- 八十路の卓ちくわあぶらげ冬菜漬 (長野市) 水木 朱実
- ハンドルに膝掛毛布駐車中 (長野市) 松本 宏要
- 風呂に湯を張れば冬蚊の舞ひ上がり (飯綱町) 小林 紀子
- 冬ざれの土塊を発つ白鶺鴒 (山形村) 村瀬 白夕
- 雪とけて家の柱が背伸びする (佐久市) 清水 武
- あたたかや同じ本屋の同じ顔 (長野市) 宮沢 信博
- 五輪時の刻印の枅年の豆 (佐久市) 西田 和彦
- 冬深し独り夜食の味噌を溶く (須坂市) 牧野 勇水
- 食堂の座布団薄し冬落暉 (小海町) 依田 久代
- 大寒やプロテインカフェ窓曇る (白馬村) 碓井 つね

選評

一句目、顔に傷ありと書けば当たり前。傷に顔ありと書けば「詩」になる。傷がボクサーの来歴を物語る。二句目、霜柱を踏むのは慣用表現。人を「大足の大魔神」になぞらえる「誇張」でこの句も「詩」に昇華した。三句目、卓に並べた総菜が個性的な「八十路」を象徴している。四句目、ウインドに雪除けの覆いを掛けるのは一般的だが、ハンドルに膝掛けはこの地の寒さを思わせる。